

「超音波診断へのアプローチ 腹部」

福岡大学講師・放射線科 東 義 孝 著
沖縄県立中部病院外科医長 松 本 廣 嗣

札幌医科大学教授
福 田 守 道

医学書院より今回出版された東義孝、松本廣嗣両氏による著書、「超音波診断へのアプローチ 腹部」は、いわゆる超音波診断法の解説書ではなく、むしろ自習書ともいえるべき特異な目的をもった書物である。

超音波診断はリアルタイム法の出現以来、特にその非侵襲性、経済性、そして診断結果の迅速性などから臨床各分野に広く普及するに至った。超音波プローブを当てるだけで皮下組織から体腔内深部臓器まで手軽に画像として認識できるこの診断法は、放射線照射を浴びる心配もないなど診断を受ける患者にとっても大変な福音となっている。

しかしながら、このような利点もときには十分に生かされないことがある。それは診断手順、正しい画像の認識に基づく正確な鑑別診断の実施が、ときには大変難しいことがあるからである。これに対する対策としては、著者の序文に明快に記載されているように、マンツーマン方式での教育が絶対に必要である。しか

しながら、いろいろな制約から医科大学や臨床検査技師教育施設では、その実技の習得がカリキュラムに組み込まれることが少なく、多くはいろいろな超音波医学講習会、書籍などによる自習に任されているのが現状である。

私も厚生省の研究助成金による共同研究で癌の超音波画像、CT画像の読影実験を行い、その読影精度が個人により大きく変動するのを目のあたりに経験した。画像の認識様式が1人1人全く異なるのである。これはまことに大きい衝撃であった。本書の著者である東義孝氏も同じような研究をなされ、そのばらつきの多いことを報告されている。先生が本書を編まれた本当の意図は、このような超音波診断学のエアポケットとも言うべき盲点を何とか解決しようとの、極めて意欲的かつ積極的なアプローチの現れであろうと信じられる。

本書を一読して極めて印象的なのは、図版が鮮明で大変理解しやすい

ことのほかに、それにつけられている解説が、簡潔、明瞭かつ丁寧に述べられている点である。対象症例の選択も肝、胆、脾、腎、副腎、消化管と広範かつまことに適切で、しかも必要な点をほぼ漏れなく記述しており、演習問題まで付け加えてある。画像の理解には面倒な理屈よりもグラフィックな呈示と納得、理解しやすい説明が第1であることは申すまでもない。

ただ欲を言えば、目的を自習書とされたために、それぞれの症例に関する文献的な記載が見当たらないが、もし将来そのようなものを組み入れられれば、本書から更に深く勉強を進めたいと思う方のために役立つことであろうと考えるものである。

このような本に出会うことで、超音波医学の教育を正式にカリキュラムに組んで教育、指導を行うことが不可欠であるということを改めて痛感するものである。

本書は腹部の超音波診断を志される多くの読者にまことに好適の書籍で、かつ医師国家試験や最近行われたつつある超音波検査士の受験などに際してよき参考となると思われる。本書が広く活用されんことを祈って筆をおくこととする。

B5判 292頁 図92 写真247
1989 定価4,944円(税込) 〒300

医学書院 刊